

# 自分の地域の魅力をどんどん語ってほしい

## 青区旧川谷小学校で「地域おこし協力隊受け入れ懇談会」開催

中山間地域の集落を維持できるかどうか。その中心的な課題は集落の将来を担う若者を確保できるかどうかです。上越市は初めての取組として、今年度、吉川区川谷地区と大島区菖蒲の2カ所で地域おこし協力隊を受け入れることにしました。そうしたなか、「川谷もよりの将来をみんな考えてみる会」（松浦忠憲会長）と上越市が共催で16日、旧川谷小学校体育館で、「地域おこし協力隊受け入れ懇談会」を開催しました。会場には地元の人たち、集落づくり支援員、行政職員など約50人が集まりました。

今回の懇談会の目的は、地域おこし協力隊の受け入れに当たってどんなことに留意したらいいのかを話し合うことです。すでに受け入れている隣の十日町市松代から星峠集落区長の山岸公男さん、十日町市の現職の地域おこし協力隊員の村山祐太さん、前職の宮原大樹さんから受け入れの経験や隊員としての体験談を語っていただき、その後、意見交換をしました。



トップバッターは星峠区長の山岸さん。協力隊員を受け入れる上での留意点をアドバイスしてくださいました。山岸さんは、「受け入れて一番喜んだのはお年寄りだった。隊員にはお茶飲みも酒飲みも仕事だと言った。地元には早くないでいたただかないと仕事ができないからだ。試行錯誤がいろいろあったが、地域で暖かく迎え、隊員がやりたいことをやってもらおうようにすることが大事」などのべました。

二番手は協力隊員の村山さん。出身は埼玉県ですが、お父さんは松代の室野出身。今年の1月に隊員になったばかりですが、この6カ月余りの体験を元気に、正直に語ってくれました。「大学では、隣近所が協力し合って暮らすなど農村の良さを学んできた。室野に行くと、じいちゃん、ばあちゃんが暮らしていたのはここかと感動した。まだ半年だが、声をかけてもらうことによって地域に慣れてきた。困ったのは同年代がほとんどいないことだ。人の少ない地域に魅力を感じつつ、ケーズデンキやジャスコなどがあある人の賑わう場所にも行きたくなる。隊員は救世主ではなく、一人一人だ。資本力もなく、集落が一気に変わることはない。でも（隊員としての期間）は）僕の人生にとって大事な3年間にしたい」と語りました。

三番手は隊員期間を終え、地元に住むことになった宮原さんです。宮原さんは平成21年11月から十日町市の隊員になった、いわば初代の協力隊員。地域の人たちも協力隊員とは何かを知らないし、隊員も「いったい、私は何をすればいいのでしょうか」という状



【リョウブ】落葉高木のひとつ。夏に白い花を咲かせます。いまはどこにでも咲いています。若芽は山菜として食べることができます。写真は吉川区小苗代にて撮影したものです。

態だったと言います。宮原さんは、「基本的には何でもやった。一番効果があったのは妻の出産だった。隣のばあちゃんが元気になった。集落がなくなったら困ると言うようになった。助かったのは、わからないことをサポートしてくれる人がいたことだ。こういうふうによれとか、やっちゃ駄目と言う人の存在が大事だ。また住民の中に自分の集落が大好きだという人がいたことも大きい。自分の地域の魅力をどんどん語ってほしい。こういう人がいるなら、この先、希望は持てる」とのべました。

3人の報告後、協力隊員の事務所をどこにするべきか、隊員の所得をどう確保するかなど意見交換しましたが、最も集中したのは協力隊員の報酬額についてでした。上越市と十日町市は隣同士です。星峠の山岸さんが、「上越市が基本給で十日町市より2万円弱少ない金額なのは理解できない。基本報酬とは別によそにはない特典があるというなら別だが」と切り出し、議論になりました。上越市の担当者から、「よそよりも労働時間を短くし、アルバイトなどができるように配慮した」などという発言がありましたが、会場に集まった住民の中からも、十日町と同レベルの報酬に引き上げを求める声が上がりました。この点は、市の幹部のみなさんが引き上げへの政治的な判断をしていく必要があると思います。3人の報告、そして意見交換、いずれも、今後の上越市の中山間地対策を考える上でいくつもヒントがあり、勉強になりました。

何がいいのかなあ。Sさんは居間のテーブルの上に小さな鏡を置いてしよつちゅう、自分の顔を眺めて暮らしています。先日、久しぶりにお茶を飲みに行ったときも時どき、鏡を見ていました。

私が訪ねた日は暑い日だったので、居間で休んでおられました。お連れ合いのチョヨさんと一緒です。自分の席のそばには枕が置いてありましたから、くたびれたときにはすぐに横になってテレビを見たり、眠ったりしておられるんでしょうね。

テーブルの上の鏡は、縦一五センチ、横一〇センチほどで、お風呂場に置いてひげ剃りに使うには手ごろの大きさです。「いつも鏡、見ていなるんかね」と訊くと、「いつも見ているがだ」とSさんは言いました。Sさんは九〇歳を過ぎ、歯がまったくなくなったことから、顔は細く見えません。

チョヨさんが台所からキュウリの漬物を出してきてくださり、三人でお茶を楽しみました。話の中心は田んぼ仕事のことでした。それも馬や牛を使って田打ちや代かきをしていたころのことですから、数十年も前の話です。「田打ちよりも代かきの方が多いぞだった」などといった話が次々と出されました。

田んぼで難儀した話は昭和二〇年の大雪の時の苦労とも重なって、どんどん惹きつけられました。「おれは若い時に母親亡くしたすけね、苦労したわね」というチョヨさん。お母さんは昭和二〇年の一月に亡くなりました。

当時、チョヨさんは未婚でした。お兄さんは冬場、静岡県のある酒造会社へ出稼ぎに出ていました。いわゆる「酒屋もん」です。大雪の中、汽車に乗って葬式に駆けつけました。お兄さんは風邪をこじらせ、旅先に戻って間もなく、亡くなってしまいました。

それからが大変だったのです。当時、約二町ほどあった田んぼの仕事がチョヨさんの肩にかかってきたのですから。その年の春作業では、近所のお父さんに馬の扱い方について習い、馬耕から田かきまですることになりました。田を打つ時はまだ良かったといいますが、「くるい返し」が大変でした。

「足袋にワラジはいていたがだでも、打った土が山になっているところに乗った時はいいがさね。そうでねとこに乗った時がきよろんきよろんして転んだもんさね」

チョヨさんは、まるで田んぼの中に入っている時のような格好をしながら語り続けました。「女しよには馬は可哀想だ、牛にしよ」という声があり、その後、牛に切り替えたのですが、その牛がまたバカでかい牛で扱いがやっかいでした。そこへ後に連れ添うことになるSさんが登場したのです。当時としては珍しいトラクターを持って行ったSさんは、「おりや、助けたがだ」と言っ、ニコニコ顔でした。

「若い時は褒められることがなかった人だ」とのチョヨさんの評価を聴いていたので、「どうせ、夜にちよっかい出したんじやないの」と冗談を言ったところ、チョヨさんは、「それが、夜になっても、ちよっかいださないまじめな人だったがでね」と答えました。

話は弾んで一時間近くにもなりました。Sさんは歯が無いので、薄く切ってもらったキュウリの漬物を時どき食べながら、鏡をのぞいていました。どうやら、この鏡はのぞき込んでみると、昔の思い出が次々と出てくる魔法の鏡のようです。Sさんは、「昔のこと、忘ねえよ。思い出してばっかりだ」そう言っ、また鏡を見ました。

「昔のこと、忘ねえよ。思い出してばっかりだ」そう言っ、また鏡を見ました。

## 明治16年3月の遭難事故も記録

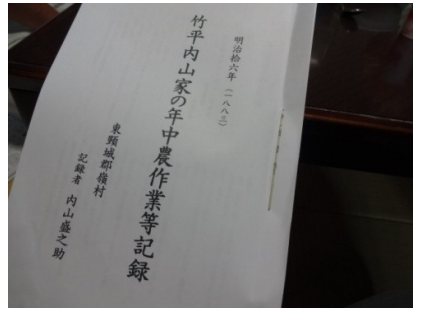
旧大島村教育長だった高橋英夫さんから、従兄を通じて「竹平内山家の年中農作業等記録」という資料をいただきました。

この資料の記録者は内山盛之助、母の実家の本家（屋号は「いん

きよ」）の人です。1883年（明治16）の1年間の農作業や集落の役員としての出来事などが記録されていて、当時の農作業の実態や方言などを知ることができます。

私が注目したのは3月の日記です。というのは、同年の3月12日、尾神岳のふもとで東本願寺の再建のための大ケヤキをソリで運んでいた人たちが雪崩に巻き込まれ、27人が犠牲になった事故があったからです。7日の日記には、「竹

之助川谷村御本山『大持引』に行く」とあり、さらに事故当日の12日の日記には、「雪ちらちら降る。此日盛之助御本山大持引に出る。川谷上より大神嶽のコシを通り、大神村・川谷村地境にて山より『大雪ナゼ』が出、大勢『雪ナゼ下』に相成る……」とありました。大変貴重な資料です。



**上越地域各消防署における空間放射線量測定結果**（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	7月10日(水)	7月17日(水)
上越南消防署	0.030	0.033
上越北消防署	0.050	0.050
新井消防署	0.043	0.053
頸北消防署	0.046	0.050
頸南消防署	0.043	0.040
東頸消防署	0.043	0.047
高土分遣所	0.050	0.050
名立分遣所	0.047	0.057

**「出資法人等」の規定も盛り込み自治基本条例の一部改正へ**

16日の市議会各派代表者会議で、自治基本条例の一部改正の議員提案をしていくことを全会一致で正式に決定しました。改正案は今後、パブリックコメントにかけ、市民の意見を聴いて最終決定しますが、出資法人等に関する規定を行政運営の中に入れるものです。

※市議会総務常任委員会の視察報告第二弾は次号に掲載します。

